

いもせやまおんなていきん

妹背山婦女庭訓

〔解説〕

明和八年（一七七二）大坂竹本座初演。近松半二らの合作で、全五段の時代物。当時衰退していた竹本座がこの作品の大当たりにより盛り返したと言われるほど、人気のあった作品です。物語は藤原鎌足親子による蘇我入鹿討伐を題材に、大和地方の伝説や謡曲、幸若舞曲などを取り入れ複雑な構成の大作となっています。

天智天皇の御代、蘇我入鹿は天皇派の藤原鎌足を失脚させ、自ら帝位につきます。入鹿は母が白い牝鹿の生血を飲んで生まれた為、超人的な能力を持っていましたが、爪黒の鹿の血と嫉妬に狂った女の血を混ぜ鹿笛に注いで吹くと、その力が失われるという宿命でもあり、ついにはその弱点を突かれて討伐されるのです。

〔あらすじ〕

鎌足の子淡海（たんかい）は烏帽子折の求馬（もとめ）に姿を変え、三輪の杉酒屋の隣に住んでいました。

〈井戸替の段〉

七月七日、杉酒屋では近所の人も手伝って井戸替えが行われました。その後、酒盛りをしていると、隣家の求

馬が顔を出します。求馬が去った後、家主がやってきて、藤原淡海を捕まえた者には大金が与えられるという話をしています。

〈杉酒屋の段・道行恋芋環〉

杉酒屋の娘お三輪は求馬と恋仲になっていますが、井戸替えの日の夕方、求馬のもとに人目を忍んで橘姫が尋ねて来ます。お三輪はそのことを丁稚の子太郎から聞いて、求馬の不実を責めますが、求馬はうまく言い逃れをします。お三輪は二人の仲を誓うため、七夕に祀ってあった紅白の芋環(おだまき)の、赤い方を求馬に渡します。そこへ橘姫がやってきて、お三輪と橘姫が求馬を取り合い、さらにお三輪の母が帰ってきて、求馬(淡海)を捕まえようと騒ぎになります。

〈杉酒屋の段・道行恋芋環〉

夜の布留(ふる)の社で、求馬をめぐって橘姫とお三輪が争っています。夜明けの鐘の音に驚いて逃げ帰る姫の袖に、求馬は芋環の赤い糸をつけ、その求馬の衣の裾にお三輪が白い糸をつけ、それぞれ糸を辿って後を追っていくのでした。

井戸替の段

「引いたりや／＼引いたりやな」

「オ、」

「引いたりやな」

「オ、」

文月七日例年の水を新井に繰り返す、釣瓶の綱も三輪の里。

酒商売の世過ぎ屋が、身過ぎの水の内井戸を、わけて祝ひの賑はしき。

「サア／＼済んだ」

と取り／＼に、神酒洗ひ米供へ物、皆々汗を入れにけり。主の母は納戸より運ぶ用意の酒肴、いつにないはや／＼機嫌。

「近所の衆、どなたも大儀でござんした。嘉例の通

り酒盛して、暮れるまでゆつくりと遊んで去んで下さんせ」

「ア、又雑作なよしにさんせい。おいらが相貸屋で手伝ふのも、年中ここの井戸の水を使ふ恩返しぢや。ノウ五洲兵衛、さうぢやないか」

「オ、さうとも／＼。気を張つてもろてはいかう術ない。これからはいつもの通り、賑かに遊びましよ。サア野平、藤六、騒ごぞや／＼。ほんにそれはさうとコレかみさん、見ればここにも寺屋の様に七夕様が祭つてあるな」

「サイノ、マア見て下さんせ。愛たてないと思はんしよが、こちの娘のアノお三輪、何やら星様に願があるとして、あの様に内で祭りも色々の供へ物。ハ、ませた世界ぢやないかいな」

「ホ、そりやマア奇特なこつちや。そしてこのお娘

は留守かえ」

「アイ、小さい時往た寺子屋へ七夕に呼ばれました。サア／＼一つ吞んで下さんせ。ヤイ子太郎、酌をしをらぬか。どりゃ吸物に豆腐でも炊いて来ましょ」と母親は、納戸へ入れば。打ちくつろぎ、廻る盃底なし共、引き受け／＼一気吞み、肴の鉢を引き寄せ、箸離さずの滅多喰ひ、丁稚の子太郎呆れ顔。

「ア、てさて気味のよいとは挨拶ぢや。余程下作な呑み様ぢや。井戸の鮒が水吞む様に、口開いてがつぽがぽ、がつぽがぽ。エエそれでは味が知れにくかる。コレこの酒はかみさんが張り込んで、こちらの銘酒の第一番、男山といふ酒ぢやが、こなはん達はほんの無茶吞み。この銚子の代り目から、もう鬼殺しにしてくれう。そしてマアよい加減に酒吞まんだら、いつもの通り騒ごかい。こちらのお三輪さんの三

味線と太鼓も借つて置いた」

「おつと合点」

と口利きの、土左衛門が眉に皺。

「それはさうぢやが、この隣へ近頃来た相貸屋の烏帽子折、この井戸替へにも立ち合はず、あんまりなめた奴ぢやないか。野平なんと思やるぞ」

「ア、ソレ／＼生じらけた顔付きで、馬鹿慇懃な生まれ付き。平生抜かす挨拶も、モ子細らしい切口上、毛唐人の様な奴。大方ソレ、今流行る早学文といふ本を見て、唐のはめ句をしをるのぢや。この井戸替へにも出合はぬからは、きつと物言ひ付けてやろ」と貸家の内の神様達、御託宣も取り／＼に、それとも知らずのつしのし、帰る隣の烏帽子折、辛き世渡り甘口に羊羹色の黒小袖、一腰差した取りなりに、浪人とこそ知られける。門口より腰屈め、

「隣家にをります其原求馬でござります。お屋敷方の用事につき、未明より罷り出で只今帰宿仕る。後室様にはいよ／＼御機嫌麗しうござりませう。後刻ゆるりと御意得ませう」

とわが家へ入るを、惣々が

「ア、これ／＼／＼、マア待たんせ。今日はコレこの井戸替へ。相貸屋が寄つてゐるのに、こなさんばかり来ずにゐて、付き合ひが済むのかい。エ、ただしおいらを潰すのか」

とねだり台詞に、求馬はびつくり、上り口に両手をつき、

「これは／＼、お顔を見れば皆合壁のお方々。これの井戸替へお手伝ひ、かつ以て私存せず。これと申すも不案内から、先格の作法を存せず。段々の失礼真平御赦免下され」

と畳に額擦り付くる。

「ア、これ／＼、また子細らしい事言はんすかいの。ハテ勝手を知らにやしよことがない。了簡せいならそれで済む。こちら一番言ふた後は、モウいざござはないわいの。この土左衛門が呑み込んだ、ア、呑み込んだ」

「しからばあなた様がお取り成しで、か様の御教訓なされた上は、そのいざござとやら申す御遺恨はござりませぬか」

「サアもうよい、言はんすな／＼、ウイ、ア、。さておいらは余程酔うてゐる。これからは嘉例の騒ぎぢや。調子が合はいで面白い。サア／＼この石できゅつとやらんせ」

「ハ、忝なうはござりますが、私一滴もたばませぬ」
「オツトそしたら勝手次第ぢや。サ、サア／＼これ

から騒ぎの趣向。この土左衛門に烏帽子屋殿、五洲兵衛に丁稚の子太郎、しめて四人の大踊り。三味線太鼓は野平、藤六、よいかく。求馬さんも合点か」

「スリヤ私にもその踊りを」

「オイノ。こなはんはこの貸屋での新面、猶踊らにやならぬわい。音頭も俺が二役ぢや。サ、ササよいかく。やるで、やるでく。ヤア千代の始めのひと踊り、まづは松坂越えたえ。踊りはありやく、ハツハ、ヨイヤサ」

烏帽子屋殿はもちくと、手持ち不沙汰に揉み烏帽子

「ヤツトサ」

「ヨイく」

「ここの娘の柳さび、引き立て烏帽子と折りかけた、

ヤツトサ」

「ヨイく」

家主茂次兵衛いつきせき

「ア、コリヤ、コリヤく、いかに嘉例の祝ひでも、余り騒ぎが嵩高な。ちと静かにせんかい。コリヤ喧しいわな、ちと静かにせんかい。コリヤヤイ。ヤンヤラヤイノヤイ」

茂次兵衛叶はず共々に、叱る詞も拍子づき、

「アソレ、ヤツトサ」

「ヨイく」

「この家主を袖にして、酒を吞めとも言はばこそ。アソレ、ヤツトサ」

「ヨイく」

「おのれらばかり吞み喰らひ、近所を構はず大騒ぎ。アソレ、ヤツトサ」

「ヨイ／＼」

「これ程言ふても聞き入れにや、家明け付けるが合点か」

「オ、サ合点ぢや、お家主渡した」

と踊り拍子の酔ひ機嫌、夢中になつて立ち帰る。

後に家主ただ一人、振り残されてグニヤとなり、

「ア、しんど、ア、しんど。コリヤ子太郎よ、わり

やマア心持ちはどんなもんぢや」

「ア、イヤモ、心持ちはあんどろもつちや」

「エ、何言ふぞい。時に子太郎、俺は貴様に内々で

頼まにやならぬ事がある。マア／＼ここへ」

と小声になり、

「門の戸は開けてある。見る人も聞く人もたんとある。さてマアここのお娘は器量好し、あんなお娘と

コレマ添ひ臥しの、身は家主の阿呆ぞと、月夜も闇

夜も無茶苦茶に、色をせうとてお姿を、見るとガタ

／＼胴震ひ。魂抜けて中風病み、よう利く惚れ葉があるならば、百とこ買うて来ておくれ」

と子太郎傍に引き寄せて、拝み頼むぞ阿呆らしき。

「ム、そんならこちのお三輪はんに御執心でござりますか」

と問はれて猶も、髭むちや顔、

「余所の男はいさ知らず、家主のあられもない。お三輪に惚れたといふ事が、嘘偽りに言はれうか」

「ムウ、そんならそのお詞に違ひなくば、なんぞ確かな頼みの印。それ見た上でへ、お仲立ち」

「エ、そりや何抜かすのぢや。肝腎の用を忘れた。

エエ婆さん内にか、逢ひたい」

と言ふ声、聞いて納戸より、

「オ、これはマアお家主様か。ヤイ子太郎め、あな

たがお出でなされたら、なぜおれに知らしをらぬ」

「エ、何言はんすやら。アノお家主様も今まで同じ様に、踊つてであつたもの」

「エ、またづけ〜と何言ひをる。サア〜申し、なんぞ御用でござりますか」

「オ、用とも〜大事の用。エ、さるお侍から頼まれたが、入鹿様の言ひ付けで、ソレ鎌足といふ和郎の息子の淡海、方々と流浪してゐるげな。それを見付けたら大金、なんでもマアこちへござれ。とつくりと言ふて聞かそ。サ、ちやつとござれ、ちやつと、ちやつと〜」

「ハイ、ハイ〜、そしたらお前へ参りましょ。ヤイ〜子太郎よ、サア忙しうなつて来た、忙しうなつて来た。もう日が暮れたさうな。火も消して店開けい。用心に気を付けい。又この娘は寺屋から戻り

が遅い。ソレ酒買ひが来たら叩き出せ。盗人が来たら酒計つてやりをれ」

と気の急ぐ儘に間違ひだらけ、打ち連れ

杉酒屋の段

てこそ出でて行く。

日とともに當むさまも入相の、四方の市庫戸ざし時。
子太郎跡を打見やり、灯を上げ表の戸、夜の構への
そこここと、こなたの道より歩みよる振りの袖の香
やごとなき、面を隠す衣かづき誰れ白絹のやさ姿。
窺ふうちに隣りの軒。知らせのしはぶき、主の求馬

「今宵はどうしてはやりし。サア／＼こちへ」

とその跡は云はず語らず手を取つて、戸口立寄せ入
る跡に子太郎は不審顔。隣りの門口耳をあて、聞き
すまして立戻り、

「なんでも隣の烏帽子めはおれとは違うてよつぽ
どえらい色事師ぢやわい。あいつが見事な烏帽子で
アノしろものを占めをと聞えた。こちのお娘に聞

かせたら。たいていのこつぢやあるまい。エゝはし
早い奴ではある」

とつばやくところへ、娘のお三輪、寺子屋戻り、足
はやに門口這入れば、

「やお三輪様戻らんしたか。サア／＼ことぢや／＼
／＼大事ぢや／＼」

「オゝあの人わいのなんぢやいの。私にびつくりさ
しやつたわいの」

「エゝさしやつたわいの、さしやつたわいのどころ
かいの。これお前に忠義を云うて聞かす」

「忠義とはなんのこつぢやいの」

「エゝ忠義とは忠臣のこつぢやわいの」

「サその忠臣は知つてゐるがの。それがどうぞした
かや」

「サその忠臣はの、アノ隣りの烏帽子めがナ」

「隣の烏帽子とは、求馬様のことかいの」

「オゝ求馬く、その求馬の姿から起ったこと。こちらの内儀様は家主へ用があつていかしやつた。その跡へなんぢやか知らぬが、真白な絹をかづき、幽霊かと思うたら、美しい衞妻が隣の門口ことくく、ことくくくと叩いた。そしたら求馬様がつつと出て、『ようはやう来たナア』と、手に手を取つてうちへはいった。ナントお三輪様。コリヤだまつては居られまいがな」

「そんならなんと云やる。求馬様の所へ美しい女中様が見えて、その女中様を連立つて這入らしやんしたと云やるのか」

「アイ」

「そりやマア合点のいかぬこと。幸ひか様も留守なれば、そなた往て求馬様をここへ連れて戻つてた

も」

「オット合点、呑み込んだ」

と走り出でて隣の門、破れるばかりに打ち叩き、
「コレ求馬様、隣の酒屋から使ひに來た。今のが済んだら、アゝソレ印判持つてござんせ」

と口から出次第、求馬はびっくり、『なにやらん』と立出づれば、ものをも云はず、

「マアくこちへ」

と無理やりに手を引連れてわが家のうち。それと見るより娘のお三輪、口に云はねど赤らむ顔。

「求馬様お帰りなされたか」

「ホこれはくお三輪様。寺屋へお出でなさったげな」

と互ひに味な墨付きを、子太郎がひつ取つて、

「サアおれが役はもうこれまで、そこへなにかの立

引きさんせ。ここらでわれら粹をとほし夜食の扶持にありつかふ。兩人ともエヘン、ソモのちに逢はう」と納戸へ走り入りにける。跡に二人は接穂なく、おぼこ育ちの娘気に思ひ詰めたる一筋を、云はうとすれば胸迫り、

「いま子太郎に聞いたれば、美しい女中様が宵からお前へ来てぢやげな。定めてそれは隠し妻。これまでお前とわたしが仲、逢うことさへもたま／＼に、千年も万年も変らぬ契りと仰しやった、その約束は偽りか。浮世の訳も弁へぬ在所育ちのわたしでも云ひ交したこと忘れはせぬ。あんまりむごい」と取り付いて、涙先立つ恨み言。

「これは思ひも寄らぬ疑ひ。なる程女中は来ているが、あれはソレ春日の神子殿。その連合ひの禰宜殿の烏帽子をあつらへに見えたのぢや。美女はおるか、

いかな天女が影向あつてもほかへ散る心はない。和歌三神を誓ひにかけ偽りはもうさぬ」

と時の間に合ひ落付かせば、さすがおぼこの解けやすく、

「神様まで誓言に、それでわたしも落付いた。必ず変つて下さんすな」

と立上つて、七夕に供へ祭りし二つのおだまき。持出でて前に置き、

「わたしが寺屋にいた時にお師匠様に聞いて置いた。殿御の心の変らぬやうに星様を祈るには白い糸、赤い糸、おだまきに針を付け結び合はせて祭るとやら」

「オゝそれがすなはち願ひの糸の乞巧針」

「ムお前もよう知つてぢやナア。白い糸は殿御と定め、女子の方は赤い糸。それで私もこの願籠め寺屋

で見た本の中に、心をかけし女の歌。アゝなんとやら、オゝそれよ『恋ひ渡る、思ひはちぢに結ばれて、幾夜願ひの糸の緒環』

「ホゝその男の返しには『相見ての、のちも願ひの糸筋を、よそへ乱すな君が小田巻』」

「アイくさうでござんした。いつまでも変らぬし、赤い糸をお前に渡し、白い糸を私が持ち、契りも長き願ひの糸。夫婦の約束星合ひにかささぎならぬ小田巻を千代のなかだち取りかはし、肌につけ合ふわりなきゑにし」

求馬がうちより以前の女、歩み出でてこなたの門口。
「隣りの烏帽子折様はこなたへ来てござるかな。許さつしやれ」

とうちへ入る。姿に求馬は手持ち不沙汰。お三輪はなんの気も付かず、

「アゝあなたがいまのお人かえ」

「オイノあれく神子様ぢや。それで薄衣着てござる。ナアもうし、お前様はアノお連合ひ様の烏帽子をあつらへにお出でなされましたのぢやナ。さうでござりませうがな。サゝゝさうでござります」
と紛らかす。包む詞の絹を漏る、月の笑顔をぴんとすね、

「コレもうし求馬様。あの女中はお端女か、なに人でござります」

「アアイヤこれはこの酒屋の娘御」

「ムゝそのマア隣りの娘御と最前から久しい間、なんの用がござりました」

と問はれて求馬は答へもなく、うちつく素振り、見て取るお三輪。

「アゝもうし、コレ神子様とやらいふ女中様。人を

マアお端女かなんのとひっこなしたものの云ひやう。求馬様にはアイ、私が用がたあんどござんす。

お前のお世話になるまいし、構うて下さんすな」

「オ、これははしたない。そのやうに云はしゃつても、そもじなどの用を聞く求馬様ぢやないわいなう。

サアお帰り」

と手を取れば、お三輪が隔てて、

「イエ／＼、わたしがまだ用がある。いなすことはなりませぬ」

「イイヤここには置きはせぬ。邪魔せずとそこ通しや」

と、手を引つ立てて立出づれば、

「イヤ離さじ」

とお三輪もまた、あなたへ引けば、こなたへ引く、訳も渚にたはれる雁、つばさ振り袖ふり分け姿。恋

を争ふ、その折から、いきせき戻るこの家の母。

「ヤア求馬殿。こなさんには用がある。どっこへも遣ることならぬ。動くまいぞ」

と身構へに、なにかは知らず白絹の姫は外へと出で行くを、とめる求馬に、またすぎる娘を、押分け母親は、

「求馬やらじ」

と引止め、繋ぐ手と手をしがらみの風に揉まるる争ひに、子太郎立出で見廻して『これ幸ひ』と母親の帯にしつかりくくつたる縄先、桶の呑み口にゆひ付け納戸へ逃げて入る。こなたは互ひに恋ひ慕ひ姿乱るる姫百合の、手を振りきれば、一時に乱れて走るを、母親が、『遣らじ』と追へば繋ぎ縄、力む拍手に呑み口抜け、酒は滝津瀬びつくり敗亡、三人門へ遅れじと同じ思ひを跡やさき、道を慕うて

道行恋苧環

岩戸隠れし神様は、誰と寝ねして常闇の、夜々毎に通ひてはまた帰るさの、道もせ気もせそれも何故恋故にやつるゝ所体恥かしと、おもかげ隠す薄衣に、包めど香り橘姫、思はぬ人を思ひ侘び、心のたけを口説けども、つれなき松の下紅葉、焦がれて絶へん玉の緒も、殿故ならば捨て草も暫しは憩ふ芝村の、釜が口をも出離れて、歩むに暗き、くれ竹の、茂れる中を分け行けば、松の木の間にちら／＼と、見へつ隠れつ、帰るさの、跡を求馬が慕ひ来て、互にはたと行き合ひの、星の光に顔と顔。『ヤア恋人か何故に、こゝまで跡を追ひ鳥は、もしやねぐらの契りをも叶へてやろとのお心か』と、胸にはいへど詞には、おもはゆぶりの袖几帳。

「成程切なる志、仇に思はじさりながら、さほど焦がるゝ恋路にて、昼をば何と鳥羽玉の、夜ばかりなる通ひ路は、いと不審なり名所を、聞いたる上はこなたより、二世の固めは願ふ事、あかさせ給へ」
とひたすらに問はれて実にも恥かしの、もりてあまれる浮き身の上、

「語るにつらき葛城の、峰の白雲あるぞとも、定かならざる賤の女と、思ふて深い疑ひの、雲を晴らして自らが、思ひも晴らして給はらば、どんな仰せも背くまい。たとへ草葉の露霜と、消えても何の厭やせぬ。これ程思ふに胴慾な、解けぬお前のお心は、あんまり結ぶの神様を、祈り過ごした咎めかや。つれなの君や」

と恨みわび。思ひ乱るゝすゝき蔭、それとお三輪は走り寄り、なかを隔てゝ立つ柳、立ち退く袂引き止

め、

「エ、聞えませぬ求馬様。ソリヤ氣の多い、悪性な。そもや二人が馴れ初めは、始めて三輪の過ぎし夜に、葉越しの月のおもかげは、お公家様やら侍様やら知れぬなりふりすつきりと、水際の立つ好い男。外の女子は禁制と、しめて固めし肌と肌。主ある人をば大胆な、断りなしに惚れるとは、どんな本にもありやせまい。女庭訓躰け方、よふ見やしやんせ、エ、嗜みなされ女中様」

「イヤそもじとてたらちねの、許せし仲でもないからは、恋は仕勝よ我が殿御」

「イ、ヤわたしが」

「イヤわしが」

と、ともにすがりつ、手を取りて

へ園に色よく咲く草時は、男女になぞらへ言はゞ、

言はれふものか夕顔の、梅は武士、桜は公家よ、山吹は傾城、かきつばたは女房よ。色は似たりやあやめは妾、牡丹は奥方よ、桐は御守殿、姫百合は娘盛りと撫子の、さあなるぞえ／＼。なるとならずと奈良坂や。

この手柏の二人の女、睨めば睨む萩と萩、中にもまるゝ男郎花、放ちはやらじと縋り付き、こなたが引けばあなたが止め、恋のしがらみ蔦かづら、付き纏はれてくる／＼、廻るや三つの小車の、花より白む横雲の、たなびき渡りあり／＼と、三笠の山も程近く、鳴る鐘の音に驚く姫『帰る所は何処ぞ』と、求馬が氣転振り袖の、はしに縫ふてふ取り交はす。縁の苧環いとしさの、あまりて三輪も愀氣の針、男の裾に付くるとも、知らず印の糸筋を、慕ひ慕ふて

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。